

席・重席・加席問題

寺 田 范 三

周禮の司几筵の職に「掌五几五席之名物」とあるが、今こゝで問題とするのは席であつて、その席の種類と敷き方とに就いて論じてみようと思ふ。

一、席

席を設ける場合、その事の性質、例へば祭祀とか賓客とかにより、又それに着席する人の身分、例へば天子とか諸侯とかによつて、種々の差を設けてある。

司几筵の五席といふのは、鄭注によれば、莞・纁・次・蒲・熊の五種の席で、その外に尙喪事に用ひる葦・萑の二種の席がある。即ち場所と場合と人によつて區別せられ限定せられてゐる。莞は廣雅に爾といひ、爾雅に苻籬といふが、詩の斯干の鄭箋には小蒲をいふとある。要するに同一物であつて、水中に叢生し細莖で圓くて中空である。之から席を作る。纁は鄭注では蒲莢を削つて之を開き展べ、五采に編むといふ。次は桃の木の枝を順次排列して模様を作つたものといふ。鄭司農は虎の皮といふ。蒲は莞に比して粗弱で扁平である。熊は熊の皮を席にする。葦は大葭であり、萑は公食大夫禮の鄭注には細葦とあり、又今文では萑を莞としてゐる。是等の席は夫々次のやうに用ひられる。

凡そ大朝覲・大饗・大射・封國の諸侯を命ずる場合等には、牖と戸との間に於て、王位に黑白の文の

斧形のある屏風の形をした黼依を設け、その依の前に南向に王の爲に莞筵紛純を設け、纁席畫純を加へ、次席黼純を加へる。二鄒に於て説明が多少異つてゐるが、莞筵は白繡の縁が取つてあり、纁席は雲氣を畫いた縁が取つてあり、次席は黑白の文の斧形のある縁が取つてある。そして一は筵といひ、二は席といふのは、どういふわけであるか。春官の序官司几筵の鄭注に「筵亦席也、鋪陳曰筵、藉之曰席、然其言之筵席通矣」とあり、又その職の所の賈疏には、筵も席も意味は同じであるが、最初地上に敷く一重を筵といひ、次に其の上に重ねて敷くを席といふ。更に鄭注を引いて莞筵・纁席・次席の三重であるといつてゐる。即ち纁席を加へ次席を加へるといふから、纁席と次席とは勿論加席であるが、莞筵と纁席と次席とで三重といふのは、次に論じようとする重席の三重といふ意味であるかどうか。思ふに之はその意味ではなく、三種の席を重ねるといふ意味であらう。乃ちその下の經文及び鄭注を見ると、王が先王を祀る時の席と、酢を受ける時の席も亦このやうであるとあつて、賈疏には先王を祀るは宗廟の六享をいひ、皆上の三種の席を用ひ、酢席は王が尸に酌し尸が王に酢し、王がその酢を受ける時の席をいひ、亦上の三重の席と同じであるといつてゐるから、先に莞筵纁席次席の三重といつたのは、やはりこゝと同じく三種の席といふ意味に用ひたもので、重席の三重といふ意味ではない。従つてその賈疏に於て最初地上に敷く一重を筵といふといつた一重も、一種といふべきであらう。何となれば、王のこの敷席の法は、後の重席の所で明になるが、筵は一重ではなくて、五重であると思ふからである。

諸侯が禘祫及び四時の祭祀をする時は、蒲筵纁純で莞席紛純を加へ、その酢席は莞筵紛純で纁席畫純を加へる。國賓を牖前に筵する時も同じである。即ち王の場合は三種の席であつたが、諸侯の場合は二

種の席である。

天子即ち王が四時の田獵には熊席を設け、又喪事には葦席を設けて、柏席には萑席黼純を用ひ、諸侯は紛純であるが、是等は非常の場合であるからその敷き方も異つてゐる。

二、重席・加席

禮記の禮器に「天之席五重、諸侯之席三重、大夫再重」とあつて、鄭注に此の差を以てすれば、上公は四重であるといひ、孔疏には諸侯の席三重とは、相朝する時をいひ、賓主皆同じである。三重とは四席である。次に引證として「熊氏云、二重則三席也」といひ、大夫再重は人君より卑しい故である。(中略)天子が既に五重で諸侯が三重であれば、この席數と豆數棺數等併せて案ずれば、上公と諸侯との席數は同一ではない。今諸公が三重であれば、明かに上公は四重である。熊氏がいふに、天子禘祭の席五重といふのは此の文のことで、則ち禘は宜しく四重であるべく、又時祭三重とは司几筵の職の文で、神の酢を受ける席も然りといひ、更に大朝覲・大饗・封國諸侯を命ずる時も皆然りといつて、是は司几筵の職の文によつて知ると述べてゐる。

燕禮に「司宮兼卷重席、設于賓左東上」とあつて、鄭注に重席とは蒲筵を重ねるとあつて、賈疏に「案公食大夫記云、司宮具几與蒲筵常緇布純、加萑席尋玄帛純」とあるが、彼は異國の賓の爲であつて、蒲筵と萑席との二種の席があるから、加と稱するといつてゐる。又燕禮に「卿升拜受觶、主人拜送觶、卿辭重席、司宮徹之」とある鄭注に、重席は加席ではないけれども、その重累してゐるが爲に之を去る。之は君を避けるのであるとある。即ち二種の席に於て加席といひ、一種の席を重ねて設けるから重

席といふのである。郷飲酒禮にも「若有違者諸公大夫、則既一人舉觶乃入、席于賓東、公三重、大夫再重」とあつて、賈疏に三重再重といふものは、席に地の依るべきあること、衣裳の身に在るが如く、一領を一重となし、再重三重は猶二領三領の如しとある。只是だけでは一種の席か二種の席か分らぬ。それは衣裳によつて一重は一枚、二重は二枚、三重は三枚重ねることは分つても、それが一種か二種かを明示してないからである。其の下の經に「大夫則如介禮、有諸公則辭加席委于席端、主人不徹、無諸公則大夫辭加席主人對不去加席」とある。鄭注に加席は上席である。大夫の席は再重といつてゐる。賈疏では之を説明して、加席は上席であるといふのは、其の再重三重は皆一種であるから、上席を加席といふのである。郷射禮の記にも「蒲筵繡布純」とあるから、明かに異席はない。其の郷大夫が賢者を貢し、公と大夫と來つて禮を觀るのみであるから、俱に重數を加へたが、更に異席はないといつてゐる。即ちこの鄭注の加席は一種の席を重ねた上部の席を意味したもので、前の繡席を加へ次席を加へたやうな異種のもを意味したのではない。従つて重席が一種の席を重ねた席であることはいよゝゝ明かである。そこで前述の禮器の孔疏にあるやうに、この重席の三重が四席であり、二重が三席であれば、加席が上部に一席あるから、下部に三重の場合は三席あり、二重の場合は二席あることになる。

郊特性に「大饗君三重席而酢焉」とあつて、その孔疏に「案周禮司几筵、諸侯莞筵紛純、加繡席畫純、上有二席、得爲三重者、皇氏云、三重者、有四席爲三重、謂鋪莞筵三、上加繡席」と皇氏の説を引證してある。即ち莞筵紛純と繡席畫純とは、前述のやうに二種の席であつて、この二種の席を重ねたのでは三重とはならない。即ち二重といふべきである。然るに諸侯の席三重といふのは、皇氏の説のやうに、

下に敷く莞筵粉純を三重にすることで、纁席畫純は加席であつて、この席の重數に關係はない。然るに熊氏は郊特牲の孔疏に引いてある所に依ると「席之重數、異於棺也、三重止三席也」といつてゐるが、それならばこの二種の席で三重であることを如何に説明しようとするのか。殊に前述の禮器の孔疏によれば、熊氏の説を引いて「熊氏云二重則三席也」とある。もし孔疏に誤がないとすれば、熊氏の説は前後撞着した議論で據るに足らぬものである。

以上論じた所によつて、天子の席五重も同様に下に敷く莞筵粉純が五重であつて、その上に纁席畫純と次席黼純との二種の加席を加へることになる。以下四重、三重、二重、一重も皆これと同様に重數を數へ、加席の數は二種の時も一種の時もあり、又加席は無い時もあるが、席の重數には變化はない。従つて席は加席を含めると天子の時は五重七席となり、諸侯の時は三重四席、大夫は再重三席、士は一重二席となつて、之を五重五席、三重三席、二重二席、一重一席と考へるものは誤である。(終)

易 字 攷

小 嶋 政 雄

易が書物の名であることは先人が既に幾度か述べてゐる所で争はれぬ事實である。然らば其の命名の理由如何といふことになると必ずしも判明してゐない。で専ら説文をあさつて色々考へてみた報告が本